



国・地域	: France, Alsace	フランス、アルザス
地区、村	: Pfaffenheim	ファッフェンハイム村
醸造・栽培責任者	: Jean-Pierre Frick	ジェン＝ピエール・フリック
HP / SNS	: https://www.pierrefrick.com/	

ワイナリーと造り手について

ドメーヌ・ピエール・フリックは、アルザスの南側の都市コルマル近郊のファッフェンハイム村において12世代にわたりブドウ栽培を続けてきた家系に連なる生産者である。現在のドメーヌは、ジャン＝ピエールとシャンタル・フリック夫妻によって運営され、約12haの畑を管理する。

1970年からジャン＝ピエールの両親はバイオロジック栽培に取り組んでおり、1981年にはバイオダイナミック農法に転換した。1986年にはデメター認証を取得しており、アルザスにおけるバイオダイナミック栽培の草分け的存在のひとりだ。彼らの姿勢は、単なる栽培技術の選択にとどまらず、農業のあり方、自然との関係性、そしてワインが社会に果たす役割そのものを問い続けるものであった。それは彼が遺伝子組み換え作物や過度な工業化、それがもたらす時間短縮としての醸造技術に対して

距離を取ってきた姿勢にも表れている。1990 年代から瓶詰まで含め亜硫酸無添加での醸造を実験的に始め、それらのワインには sans sulfite ajouté や Pur Vin とエチケットに表記がされている。



柔らかなアタック、ピュアな果実味。どこか古典的な雰囲気漂わせるフリックのワイン。派手さはないが、その静けさの奥には、時間と自然への深い信頼があり、その姿勢こそがこのドメーヌの揺るぎない核である。

近年は温暖化によりブドウの糖度が上がっている中で、亜硫酸無添加及び低添加でワインを安定させるため、白品種のマセレーションも積極的取り入れている。

畑と栽培について

ドメーヌ・ピエール・フリックの畑は、アルザスの中でも石灰質を主体とする多様なテロワールに点在している。最も離れた区画同士では約 15km の距離があり、土壌や標高、斜面の向きも異なる。

バイオリジック栽培を始めた 1970 年当時、それらの専門知識についての教育や助言は非常に限られていた。20 世紀前半からバイオリジック栽培の取り組みを啓蒙していたルメール・ブシェ (Lemaire-Boucher) の話に耳を傾け、バイオリジック栽培を実践したものの、ブドウ畑は彼らの望む均衡に到達しなかった。(土壌の高い PH が適していなかったのかもしれないと分析)。そこでスイスやドイツに目を向け、バイオダイナミック栽培に出会い、研修を受け 1981 年からバイオダイナミック調剤の使用を始めた (1986 年にデメター認証取得)。当時、唯一のバイオダイナミック栽培の専門アドバイザーであったフランソワ・ブシェ (François Bouchet) の助言を取り入れたところ、目に見えてブドウ樹の状態が良くなったため、さらに傾倒し土壌とブドウ



樹を生命体として捉える視点を深めていく。

その後も剪定や耕作などの人為的調整に改良を重ねていき、下草をより多く残し、年に一回の浅い耕作、樹液の流れを意識した剪定といった手法を採用している。それらは前年の結果と気候条件を踏まえて判断され、決して収量を犠牲にすることを目的としたものではないともいう。むしろ、過剰な介入を避けることで、結果として健全な成熟と均質な品質を得るためのものである。グリーン・ハーヴェストは例外的措置にとどまり、畑が自立して均衡がとれることを目的としている。

セラーと醸造について

セラー兼住居の外観は典型的なアルザスの農家で、12ha 分の畑から取れるブドウを醸造できるだけの十分なスペースがあり、12 世代、この地で農家として生活してきた歴史が感じられる。



醗酵は野生酵母、醗酵および熟成課程での添加物はなく、醸造容器にはジャン＝

ピエールよりも年上のフードル・アルザシアン（500-2000L の縦長の大樽）がまだまだ現役だ。しかし 2021 年の歴史的な不作により、長期間空になってしまったフードルを 5 基ほど廃棄しなくてはならなくなったために、炆器（Cuves en grès、空のまま放置可）も導入した。



残糖を含む一部のキュヴェを除き、瓶詰め時の亜硫酸添加は行われず、フィルトレーションをする場合はセルロース製の目の粗いフィルターを使う。

◆王冠栓の採用について

ジャン＝ピエールがコルク栓を排した背景は、栓由来の官能的欠陥が無視できない割合で発生していたという現実がある。高品質なコルクを選別しても問題は解消されず、合成栓やスクリューキャップも検証した結果、長期的な気密性と安定性を重視し、2002年ワインの味わいに対して最も中立で均質性を保てると考え、王冠栓を採用した。